

# カトリック教会における「父」「母」「きょうだい」「子」とは誰か

栗田隆子



くりた・りゅうこ ●文筆業。大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。著作『ほそほそ声のフェミニズム』（作品社）他、論考多数執筆。

イエスがまだ群衆に話しておられるとき、その母ときょうだいたちが、話したいことがあつて外に立っていた。そこで、ある人がイエスに、「御覧なさい。お母様とごきょうだいたちが、お話ししたいと外に立っておられます」と言った。イエスはその人にお答えになった。「私の母とは誰か。私のきょうだいとは誰か」。そして、弟子たちに手を差し伸べて言われた。「見なさい。ここに私の母、私のきょうだいがいる。天におられる私の父の御心を行う人は誰でも、私の兄弟、姉妹、また母なのだ」（マタイ12・46―50、聖書協会共同訳、以下同）

## 社会、そして教会の問題としての性暴力・虐待

「イエスの母マリア」（参照『カトリック教会のカテキズ

ム』カトリック中央協議会）を信仰の模範とする「カトリック教会」の中で起きるジェンダー差別について、私はここ数年ずっと考えている。

社会全体でも起きている問題だが、カトリック教会の中では個別の神父がそれらの性暴力・性虐待を起したのみならず、それらの犯罪行為を組織的に隠蔽してきたのだから、これらの問題は社会のみならずカトリック教会独自の問題もあると言いたい。

その問題の規模の大きさは、フランスのカトリック教会では一九五〇年以降少なくとも三〇〇〇人の子どもが性的虐待を受けていたという事実が物語る。日本でも二〇二〇年の段階で一六件の報告があったことが明らかにになっているが、これはまだ氷山の一角に過ぎないはずだ。

しかし私自身、後述するが自分自身も（カトリック教会ではなく）社会運動団体でセクシユアルハラスメント等の被害を受けたことがあるにもかかわらず、この問題について積極的に関心を持ったのは恥ずかしながら数年前からである。

正直この10年ほどは、カトリック教会のジェンダー観や、「貧困」問題に関する姿勢に疑問を覚えており、カトリック信徒であることそのものを捨ててはいなくとも、カトリック教会にはあまり近づかず、そして組織としてのカトリック教会に多くを期待していなかった私が、なぜ教会のジェンダー問題について語り出したかといえ（栗田隆子「『教会に来てほしい』と語る皆様へ」本誌二〇二〇年八・九月合併号参照）、本来は「良いことをする」はずの社会運動やNPO（最近の言葉だとソーシャルグッドとも呼ばれる）業界における性暴力やセクシユアルハラスメントの加害者の存在が明らかになつてきたからだ。

思想的な保守や革新の違い、国籍、階層等の違いにかかわらず、さまざまな場所に共通して起きる性暴力・性虐待・セクシユアルハラスメントの問題が多発していること。これそのものが、カトリック教会という

場も含めた、あるいはカトリック教会もまたその一部を構成している巨大な「社会構造」の問題ではなくて何なのだ、と思つたからである。

### 告発の難しさ、告白という負担

先ほど触れたように、一〇年ほど前に、私自身も性的な暴力や嫌がらせを複数回受けたことがある。私の身に降りかかった、そのうちの一つの出来事についてはいまだに、「誰がどのようなことを私にしたか」と具体的に語る「勇氣」はない。なぜなら私の事例は、おそらく「お前も合意したろう」といった誹り（いぢり）を免れないだろうからだ。さらに「あれはやはり暴力だったのではないか」と気付くのをさえとでも遅かつたからだ。性的な暴力や嫌がらせについては具体的に告発することには非常に負担が多いし、被害を受けた本人自身さえ気がつくことが難しいケースも多々ある。心身が解離してしまい、記憶にさえ当初残らないケースもある。

そのような現状の中で、告発という負担を負つた（負担を与えているのはジェンダー差別を許している土壌であり、それを構成している個人でもある）被害者によって、

「良いことをするはず」の界限で起きる性暴力や性虐待の実情がどんどん明らかになってきている。

そして告発された加害者の名前が出るたびに世間では驚愕の声が起こる。なぜならその人物は団体のトップで著名な人物であるばかりでなく、大抵は人望がある。とさえみなされてきた人物がほとんどだからである。違う言い方をすればその「人望」やそれに伴う「信頼」さえ、利用して行うのが性暴力や性虐待である。

そのような性暴力や性虐待が、被害者からの理不尽なまでに負担がかかる「告発」によりどんどん明らかになっていく。

### 個人の過ちではなく、教会全体の問題

このような性暴力・性虐待が組織の隠蔽によりいわば「維持」されてきた(きている)ことを考えると、ジェンダー等の「性」にまつわるカトリック教会の価値観はゆがんでおり、今なお差別を温存し続けているのだと結論付けざるを得ない。「聖職者」と呼ばれる方々の中でどれほどの人にその恐ろしさが身に沁みているかは定かではないが、これらの教会内の問題は「一人の悪い神父」が犯した個人の過ちという話では

済まない、教会全体の問題だということ。いわば、ジェンダーの問題に関してカトリック教会は、

正しい者はいない。一人もいない。／悟るものはいない。／神を探し求める者はいない。／皆迷い出て、誰も彼も無益な者になった。

善を行う者はいない。／ただの一人もいない。／彼らの喉は開いた墓であり／その唇の裏には蛇の毒がある。

口は呪いと苦味に満ち／足は血を流そうと急ぎその道には破壊と悲惨がある。

彼らは平和の道を知らない。彼らの目には神への畏れがない(ローマの信徒への手紙3:10-18)

と、パウロが詩編などの言葉を引用しながら語る状況にほぼ重なっていたのだ。

### 近代家族、核家族のイメージ支配

さらに現在のカトリック教会では(私のような)独身年配女性・非正規労働者が不安を話せる人も場が少なく、子どもの通う日曜学校や婦人会といった具合に近

代家族、核家族のイメージをそのまま当てはめたような形で教会の信徒グループも形成されてきた。

現代の日本社会で最も多い家族形態は一人暮らしであるが、私のように独身で鬱病を抱えている女性といった存在は教会のメンバーとしてみなされにくい現状がある。

ちなみに上記のことに関しては、『社会司牧通信』第217号、(イエズス会社会司牧センター)に寄稿した論考で綴った。教会内で起きた性虐待・性暴力の問題、そして組織的隠蔽というテーマだけでなく、シスターや女性信徒が本当は教会内の細々したことを仕切り、キリスト教学や聖書学、または社会運動あるいは霊的な歩みの蓄積を積み重ねながらも神父・司教を前にすると一歩引いている状況に対して、理不尽な思いを漠然と抱いていたことについて触れている。これについては、信徒の方含のネットでは反応をいただいているが、神父である立場の人からは無反応と言っている。これもまた、カトリック教会の現状なのだろう。

(※ ちなみに独身女性のことがスルーされがちだとは言え、日本カトリック正義と平和協議会全国会議「コロナの時代と教会」(二〇二二年三月一九―二〇日)基調講演会では「コロナ

の時代と教会」というテーマの中にジェンターの問題を取り上げ、成井大介司教、下川雅嗣神父(イエズス会)と話をする機会を得て、現代の日本の教会がいわゆる「近代家族」をイメージに組み立てられていることを話している)

### 自分たちの中の「貧しいもの」「病者」への視点欠落

独り者の女性という点だけでなく、カトリック教会の中では「貧しいもの」のために祈りましょう」とか「病者のために祈りましょう」という呼びかけがミサの中で投げかけられるたびに複雑な気持ちになる。このような祈りの文章は、その祈りを唱える人の心の中は違うとしても、「貧しいもの」や「病者」はその祈りを唱える集団には存在していないという前提で成立しているのではないか?と思う。

例えば私は現在、障害年金制度を使用し、かつては生活保護制度を使っていた身だが「病者のために祈りましょう」と言われると、困惑する。本当に物理的にも隣にいる人が障害者や病者であるということを想定している祈りであるならば、せめて「病者とともに病者のために祈りましょう」等とに祈れないものだろうか。自分で自分のために祈っているような気持ちにな

り、妙な気分になる。

「それならばより困っている人々、排除をされている人のために祈ればいいではないか」と言う人もいるだろう。もちろんすでにそうしてはい

る。だが、肝心なのは、「じぶん（たち）」のなかに病者や障害者が存在しているという視点が抜けてはいないか？　と言う点だ。

### ジェンダー問題に無関係な人はいない

「じぶん（たち）以外」の「困った人を助ける」という姿勢に疑いを持ちえなければ、ジェンダー問題の解決は非常に遠いと思う。なぜならジェンダー問題に無関係な人など誰一人いないからだ。

ましてやマジョリティーであるシスヘテロ（出生時に診断された性別で生き、異性を性愛の対象とする）男性は性暴力や性虐待では加害的な立場に立つことが率として高いのだから、この問題について最も他人事であつてはならない属性である。それこそ「男性」とみなされることに躊躇も違和感も感じてこなかった人間こそが、性差別、性暴力の加害のど真ん中に限りなく近い

のだ。

### 問題を起こさないうちに学ぶ

被害を受ける立場に関して学ぶのは「可哀想な人」だから学ぶのではない。それは誰かの、何かのため（いわばゼロからプラスになるような）に学ぶのではなく、性暴力や性虐待を起こさないため、いわば性暴力や性虐待という「マイナス」からそれらの暴力や虐待がないという意味での「ゼロ」にするためにジェンダーについて学び、耳を傾ける必要があるのだ。

### 暴力が生まれる土壌とは何か

そして以前書いておらず、今回触れたいテーマはどのような暴力が生まれる「土壌」とは何かということだ。

独身女性、病者、障害者、外国人、難民（としてさえ許されない非正規滞在の人々）……等がコミュニティの「他者」としてのみ存在する事実、それこそカトリック教会の「在日日本人」で「日本語中心」のコミュニティで語られる「わたしたち」の中に入れない現状だけを問題にしたのではない。

むしろ「独身女性や病者、障害者、外国人、難民（としてさえ許されない非正規滞在の人々）」を「わたしたち」の中に入れないことで成立しているコミュニティ―とはいったい何なのか？ を聞きたい。

### 「私の家族」という認識に潜む問題

そしてとりわけジェンダーの問題についてのカトリック教会の「鈍感さ」（女性司祭さえ認めない）問題の根を探るために、「家族」という言葉から考えたい。というより、冒頭に引用したイエスの語る言葉がすでに「家族」という私たちのイメージとはズレがある。というのも、それこそ「善きサマリヤ人のたとえ」でも「私の隣人は誰か」ではなく「追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と問いたように、「私の家族」ではなく、イエスにとつての「兄弟・姉妹、母」になるといふところに力点が置かれるからだ。

私自身はどちらかといえば女性の労働問題や独身女性の生活についての問題を考察してきており、DVや家族の問題を専門としてきたものではない。しかし「良きこと」をするはずの「コミュニティー」、その最たるものの一つは「家族」ではないか。そして「家族」と

いう話には常に「私の妻、私の夫、私の子ども」、そしてそれを称して「私の家族」という言葉で語られがちだ。言ってみれば「私の教会では」と自分の所属教会について語ることが多いが、それはまさに「私の家族」の延長のような発想に接続されがちだが、まずその家族認識こそが問題なのではないか。というのも「貧しいもののために祈る」という言葉で違和感を持った話ではないが、「私の」という所有格で紹介できない人間は、「可哀想な人」といったん弾き飛ばした上で、「上から、あるいは安全な内側から」憐れむ」事になる。言ってみれば「私」の領域である「家族」は確保された上で、その家族の外側にいる「可哀想な人」を憐れむという構図だ。

しかし恐ろしいのは、この「家族」の内側は果たして「安全・安心」な場所だったのか？ という問いである。家族内でのDVや性暴力はしばしば密室で行われるがゆえに、第三者の介入が難しいと言われる。この家族内の性暴力の性質はあたかも教会内の性暴力とパラレルに見えてくるのは穿ち過ぎであろうか？

しかもカトリック教会では、「聖家族」と（福音書には存在していない言葉で）いう概念がある。しかもその

「聖家族」はイエス・マリア・ヨセフという近代核家族のような姿で描かれる。イエス以外の兄弟姉妹が存在していたはずなのに、その人たちは「天の父なる神の子」ではないからか？）排斥されている。そのような「家族」観は教会にも適応され、教会そのものが「母」のようななんでもありの包容力を期待されると同時に、「神父」という存在を中心に教会名簿に登録された人々が皆「家族」としてイメージされやすい。そしてその中には「神父」を「父」のように慕う人もあらわれるであろうし、さらに「良いことをする」場所という信頼関係も生まれる。その親密さと信頼関係をこそ利用するのが、家族や教会の性暴力・性虐待（さらには社会運動やNPOなども割と恋人や家族が同じ運動に関わっていたりすることも多く、親密圏の延長のコミュニティーも多い）ではないか。

### 「私の家族」の境界線の崩れる境地

キリスト者は「私の家族」を求めるのではなく、言ってみれば「天におられる（言ってみれば父のような権力を持つ者は地上にはいない！）父」の御心、それはつまり「互いに愛し合うこと」そのものが「イエスの家族」

になることなのだ。そこには「私の家族」とそれ以外という境界線が崩れ、すべてが究極には「友」としか呼べない境地なのかもしれない。イエスが弟子たちにあなた方を「友」と呼ぶと呼んだように。

※この論考全体は、アダルト・チルドレンやDVの問題に取り組んできた臨床カウンセラーの信田さよ子氏著作『家族と国家は共謀する——サバイバルからレジスタンスへ』（二〇二一年、角川新書）および同氏によるweb連載『「よきことをなす人」たちのセクハラ』（晶文社 スクラップブック、URL: <http://s-scrap.com/6794>)。また同氏によるnote「ひとりの応答として」<https://note.com/sayokonobuta/n/feb4140c5d7d6>から非常に影響を受けた内容となっている。拙文を読んでくださった方は、これらの本やサイトを読むことを強く勧める。